夕焼け通信 1357号　2022.6.20
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）103

木幡智恵美

新学期（5）

「学校に行くのを嫌がっているわけではないから、土曜日の児童クラブは休ませてもいいんじゃない」と私が言うと、「そうだに。毎朝、七時二十分になったら必ず家を出るからね。学校まで結構遠いけど、休まずに行ってるし」と、娘も同じ思いでいるようだ。児童クラブに、六月の土曜日は休ませると連絡を入れ、娘が出勤の時は、寛大を一日預かることにした。

実歩の誕生プレゼントの浴衣を何とか仕上げて渡し、いよいよ五月も終わりに近くなった日、息子は職場から帰って来るなり、「来月から福井に行くことになったわ」と言う。これまで、米子で三箇月、奈良で一年勤務している。今度は福井か。「ヘルプで行くから、二箇月ほどだよ。奈良みたいにアパート借りるんじゃなくて、ずっとホテルらしい」と息子。一番の心配は身体のことだ。健康診断でひっかかった項目があり、精密検査を受けることにしていたのだが、それが先延ばしになってしまう。ホテル暮らしになると、コンビニ弁当や外食になり、さらに数値が悪くなるのではないだろうか。「大丈夫、一日一回は給食でバランスとれるから」と、息子に言われ、少しだけ安心する。

あれこれ取り越し苦労をしているうちに、六月に入り、土曜日には寛大を迎えた。少し咳が出るので受診してくれと娘に頼まれ、まずは歩いて近くの耳鼻科に受診に行く。大したことはなく、咳止めと胸に貼る薬をもらって帰った。夕べの残り物で昼食を摂り、咳も出ないし元気そうなので、バッタの公園に行って遊んだ。家に戻って三時のおやつを食べてからは、帰って来たジジを交えてカードゲーム。せっかくだから、次の土曜日は何か作ろうかと、娘の部屋の本棚からあれこれ探す。工作の本の中からあれこれピックアップしたものの、最終的には、小学館「生活探検大図鑑」に載っていたアイスクリームを作ることになった。

次の週、揃えていた材料で寛大と二人で作ってみた。材料は、卵、砂糖、生クリームだけ。少量ずつ砂糖を入れた卵と生クリームを別々に泡立て、混ぜ合わせて冷凍庫に入れる。二時間置いて、固まったところでもう一度全体をかき混ぜ、再度凍らすと、ふんわりしたアイスクリームができあがる。イチゴのジャムをかけて食べながら寛大が言う。「うちでもお母ちゃんと作ってみるわ」

がらがら橋日記

宮森健次

ちょこっと就労　1

ちょこっと就労を始めた。この言葉は、朝日新聞の特集記事で見つけた。どの程度流通している言葉か知らないが、フルタイムではない短時間労働を指し、記事では特に退職後の無理のない労働に焦点を当てていた。まさに今のぼくのような者が対象となっている。まあこれからはそうしゃかりきにならんでも、と言ってるような軽い響きがいい。

退職後、どのように働いたものか、あるいは働かないでいるものか、退職する前から何度も繰り返し考えてはみた。ただ、こんな問いに答えは無いのであって、せいぜい堂々巡りするのが関の山だ。同じ退職仲間たちもそれぞれに抱えている事情が違うのだから、参考になる意見なんぞまずない。今は、未曾有の教員不足時代だから、再任用を決めた人たちも少なくなくて、「何を迷うことがある」と不思議な顔をする人もあったし、「少しでも恩返しができれば」と言う人もあった。そうかと思えば、今少し陰影に富んだ人たちもいて、「子どもの学費がまだかかーに」と少し照れて言われたり、「かみさんが宗教に入れ込んでしまって」などどう言葉をかけたものかわからない者や、「パチンコにつぎ込んで蓄えが無いのだ」と、非難される余地を与えないよう平然と言い放つ者もいたりで複雑極まりない。

ある友人は、「今の学校にだけは勤めたくない。退職してせいせいした。しばらくは好きなことをして暮らす」と言った。好きなことは何だ、と聞くと、それはこれから考えるということだった。

今のご時世とそれまでの教員人生とが絡み合ってそれぞれの選択に至っているのだから、比較しても意味はない。ただぼくの場合は、選択を先送りできる状況にたまたま置かれたのであって、ならば今は決めないでいてみようと思っただけである。

ちょこっと就労は、初めてではない。高校生の時、友人のSが新聞配達をしている、というのを聞いて自分もやってみたくなった。Sは、面談の際に担任教師にそれを伝え、「これで内申書がよくなる」と勤労少年にあるまじきことを言った。ぼくもつまらん対抗意識を燃やしてしまい、抜け駆けは許さんぞとばかりその日のうちに新聞販売店を訪ねたのだった。就労の動機はとことん雑駁なものだったが、働いて収入を得るという経験は、すばらしく自由で、きっぱりしていて、甘美だった。川霧の立ちこめた道を新聞を積んだ自転車で走っていると、このまま空を飛べるのじゃないかという気さえした。一度は、町を覆うかのような怪鳥に乗った巨人に先導され、今にも前輪が浮き上がりそうになったのだった。（この稿続く）

30代フリーター　やあ、ジイさん。今年は吉本隆明の没後10年だったな。

年金生活者　このあいだ電話をかけてきた相手に言われて、それを思い出した。

30代　どんな話をしたんだ。

年金　千年に1度しかあらわれない人物と無数の無名の人たちの価値はまったく同じだと吉本は言ったと話したら、そんなことは彼が言う以前から言われてきたことではないかと言うので、同じようなことを考えていたのはラカン、フーコー、親鸞くらいしか私は知らないと答えた。そして、吉本にそうした考えがなかったら、「自己表出」や「了解の時間性」といった概念は出てこなかっただろうと話した。

　吉本はこんな言い方もしている。いちばん価値ある生き方は、自分や家族や身近な人の生活のことは考えるけれど、天下国家のことなど日常から離れたことは考えない生き方で、偉大な思想家、偉大な宗教者、偉大な政治家と言われている人物がいちばんだめなやつなんだ。思想の課題は知識を蓄えることではなく、最も価値ある生き方をしている人たち、すなわち「原像としての大衆」あるいは「大衆の原像」を思考に繰り込むことだ。

30代　繰り込んだ結果どうなったんだ。

年金　「大衆の原像」に対応する概念、言い換えればそれと相似形をなす概念として、言語論では「自己表出」が、心的現象論では「了解の時間性（時間化）」が、そして幻想論では「対幻想」が導き出されたと私は考える。そして「大衆の原像」と対極をなすものとして彼が想定した「知識人」と対応する概念、相似形をなす概念が言語論では「指示表出」であり、心的現象論では「空間的な関係づけ（空間化）」であり、そして幻想論では「共同幻想」あるいは「個人幻想」にほかならない。

　言語論を例にとれば、『言語にとって美とはなにか』で描かれた太古の狩猟人が初めて海を見て「う」と叫んだとき、そこに「自己表出」の起源がある、と吉本は考えた。その叫びはだれかに何かを伝える「指示表出」とは異なる。それは樹木にたとえれば根と幹に相当し、そこから枝が伸び葉が茂って初めて「指示表出」となる。

　知識を他者から伝えられて知識人となった者は、その知識を別の他者に伝えようとする。そのための道具が言葉であり、言葉を伝達の手段として、つまり「指示表出」として使うのが知識人だ。これに対して、「原像としての大衆」は言葉を主として身近な人たちへの喜怒哀楽や好意や嫌悪を表すものとして発する。その原型は海に初めて遭遇した驚きを「う」と表した狩猟人にある。

30代　「了解の時間性」のほうはどうなんだ。

年金　彼は人間の心の働きを、対象の「空間化（関係づけ）」と「時間化（了解）」（「了解の時間性」）の2段階の過程としてとらえた。茶色っぽい細長いものがいくつも集まったひとかたまりが目に入ってくる過程が「空間化（関係づけ）」だとすれば、それを「まずそうな焼きそばだ」とか「すぐ食べたい」と感じるのが「時間化（了解）」だ。

　「空間化」は対象をあるがままに受け入れる過程、言い換えれば客観的にとらえる過程だ。目の前にある焼きそばは、ほぼだれの目にも茶色っぽい細長いものがいくつも集まったひとかたまりとして目に入ってくる。これに対して、「時間化」は前に置かれた焼きそばを「まずそう」とか「食べたい」と感じることだから、人によって違いがあり、主観的な過程ということができる。

　ふたつの過程を吉本が「空間化」と「時間化」と名づけたわけを私なりに推測すると、前者は一瞬にして可能であるのに対し、後者は時間を必要としているからだと思う。焼きそばを前にしたとき、目には瞬時にその姿が映る。それを「まずそう」とか「食べたい」と感じるには、過去に食べた記憶や空腹かどうかという身体の状態を参照する必要があり、それには時間がかかる。

　「空間化」は対象をあるがままに受け入れる客観的な過程だという意味で、物事を客観的にとらえようとする「知識人」の態度と相似形をなしている。これに対し、「時間化」は対象を主観的にとらえることによってそれを行動に結びつけることを可能にする。

ニュース日記　835

中村　礼治

没後10年の吉本隆明

その過程は、日々の生活に関心を集中させて暮らす「原像としての大衆」と相似形をなしている。

30代　吉本がそこまで大衆にこだわるのはなぜなんだ。

年金　「お国のために」と戦争に突き進んだ日本国民が、天皇の玉音放送を境に「自分のために」とエゴをあらわにし出した豹変ぶりに彼は衝撃を受けた。「大衆」とはなんなのか。その「原像」を思考に繰り込むことにこそ思想の課題があると考えた彼は、その存在の場を「家」に求めた。

　そこから導き出されたのが家族の本質をなす「対幻想」という概念だ。吉本はこれを「共同幻想」と「個人幻想」のあいだに位置づけ、人間の全幻想領域はこれらの3つの幻想領域から成ると考えた。このうち「共同幻想」と「個人幻想」は西欧の思想も繰り返し考察の対象にしてきた。吉本の独自性は、「対幻想」をそれらふたつの領域と同等あるいはそれ以上の重みのあるものとして考察の対象としたことだ。